



『東海道五十三次 桑名』 安藤広重・作

東海道五十三次 42番目の宿場

慶長6年(1601年)に東海道が定められ、桑名は42番目の宿場となりました。

「宮宿(K82)」と海路で繋がっていたため天候の都合で渡海できないことがあり、多くの旅籠屋(現在の旅館)が必要でした。そのため、旅籠屋の数は宮宿に次いで2番目に多く、120軒存在していました。伝馬の制度ができたことで、1日に36疋の馬の提供が義務づけられました。

東海道桑名宿の整備

桑名宿は、木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川が伊勢湾に注ぐ河口に近く、古くより交通の要衝でした。東海道は日本最大の幹線道路であり、今日の東海道新幹線と東名・名神高速道路のような位置付けでした。桑名は、特に渡船場であったため、時間の都合や天候の都合で泊まり客も多く、旅籠屋の数は東海道筋では宮宿について2番目に多くありました。

慶長6年(1601年)「慶長の町割り(K63)」と同時に「七里の渡し(K03)」が整備され、側に「本陣(K15)」・「脇本陣(K16)」・「問屋場(K07)」などが密集していました。

慶長の町割りと水害

尾張国側の堤防はお囲い堤と言われ、丈夫に作られ、伊勢国や美濃国側の堤防は尾張より低かったと言われ、水害が多くありました。尾張が高く作られたのは、尾張徳川家の威光があったためと言われています。

慶長3年(1598年)～慶安3年(1753年)の155年間で水害は96回ありました。しかし、水害の多い桑名でも東海道は、洪水などの被害を最小限に抑えるように、微高地を通過しています。

現在でも川口町の海拔は、桑名城跡よりも高くなっています。

交通の要衝

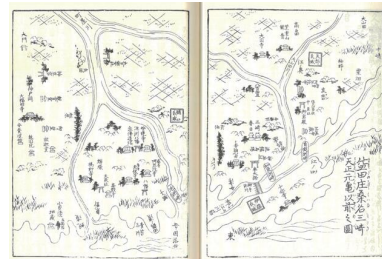
寛永12年(1635年)に、参勤交代が確立しました。東海道筋で通行量が多くなったことにより、1日に100人の人足と100疋の馬の提供が義務付けられました。

桑名宿の絵図

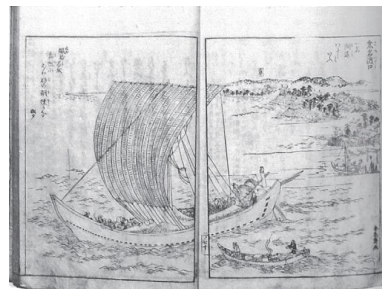
東海道桑名宿の名所旧蹟を紹介した「久波奈名所図会(K48)」は、「魯縞庵義道(K67)」によって編纂され、戦災を免れ現存しています。地方都市でここまで詳細に名所を紹介した書物はあまり見受けられません。

東海道の公園

平成3年(1991年)には、桑名城の堀の一部が埋め立てられて、旧東海道沿いに東海道五十三次を模した「歴史を語る公園(K53)」が造られました。



慶長の町割り以前の桑名 / 久波奈名所図会



東海道 桑名宿 / 東海道名所図会



桑名城絵図

桑名と伊勢を結ぶ街道と伊勢を結ぶ街道

東海道の旅人にとって、餅菓子は手早く食べられて腹持ちが良く大人気でした。桑名から伊勢までの街道には餅を売る茶店が多くあり『餅街道』とも呼ばれています。

桑名では、代表的な「安永餅(K57)」の他にも、「たがね煎餅(K55)」のルーツとも言われる『たがね餅』が桑名城下で売られていたと伝えられています。



餅街道での桑名名物

伊勢国の玄関口

江戸時代、東海道が制定され、「桑名宿(K01)」と「宮宿(K82)」(現：名古屋市熱田区)をつなぐ海路の船着場でした。七里は、海上距離が七里(約28km)であったことからきています。

海上から陸へつながる、玄関口であったため、伊勢国の入り口でした。東海道の渡船場の面影を残している、全国唯一の史跡です。



七里の渡し

七里の渡しのはじまり

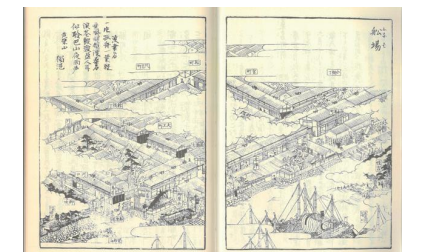
慶長6年(1601年)の「慶長の町割り(K63)」と同時に七里の渡し場の渡し場が整備されました。桑名は室町時代には『十桑の津』と称されるほど栄えた港でした。木曾の木材が桑名に運ばれた最初の記録が1422年(応永29年)で、その木材は鎌倉の「円覚寺(K81)」に運ばれました。はじめ筏のように組まれて木曾川を流され、桑名からは船に積まれて運ばれました。20年に一度おこなわれる「伊勢神宮(K84)」の式年遷宮で必要な木材は、木曾の山から切り出し、木曾川を経て桑名に運ばれています。

七里の渡し立地

七里の渡しは災害の受けにくい場所が選ばれていました。

当時の桑名の様子を描いた「久波奈名所図会(K48)」では、『此港は何の風にも船繋りよく』と言われていました。上流からの洪水、下流からの高潮が押し寄せてきても、その勢力を強く受けないように、やや入江になっていました。

現在の地形でも若干入江となっていますが、明治時代の河川改修以前は、上流の堤防は今よりも川の中に出ており、下流の桑名城石垣はジグザグ状になっていて、高潮の力を弱めるように築かれました。また、船が安全に航行し、着岸できるように、常に川浚えしていました。しかし、現在は七里の渡し跡の外側に高潮防波堤が巡らされています。



かつての七里の渡し付近 / 久波奈名所図会



明治の七里の渡し 現在のような堤防はない



現在の常夜燈



昭和の七里の渡し 桑名城壁が残っています



石碑 七里の渡し跡と山月の間に建っています

「一の鳥居」と「常夜燈」

現在の七里の渡し跡には、「一の鳥居 (K04)」と常夜燈がシンボルとしてあります。

七里の渡しに鳥居が建てられたのは天明年間であったと言われていました。しかし、江戸時代の終わり頃から、現在のように道路から斜めに建てられた絵があります。江戸から伊勢国に入って一番最初にある鳥居という意味から『伊勢国一の鳥居』と呼ばれました。

常夜燈は、当初七ツ屋（鍛冶町の近く）に天保4年（1833年）に建てられたものです。しかし、戦後に、交通の妨げになるため七里の渡し跡に移築されました。ところが、昭和37年（1962年）の台風によって、上部が壊れてしまいました。

壊れた部分には天保4年（1833年）建立の銘がありました。現在の銘は、安政3年（1856年）の銘です。これは、上部のみを多度大社から移して、すげ替えたからです。下の部分に寄進した人たちの名前が刻んであり、江戸・名古屋・桑名の人たち200名余りが寄進したことがわかります。

七里の渡しを訪れた偉人たち

江戸時代、東海道は日本最大の幹線道路であり、多くの旅人が訪れました。歴史上重要人物も七里の渡しを訪れました。

「徳川家康 (K86)」の孫「千姫 (K88)」は、7歳で豊臣秀頼のところに嫁ぎます。元和元年（1615年）大坂夏の陣が起こり豊臣氏は滅びますが、大坂城から救い出されました。千姫が江戸へ向かう道中、桑名宿の七里の渡しから熱田宮宿まで海上七里の船旅を指揮したのは「本多忠勝 (K64)」の孫「本多忠刻 (K65)」でした。千姫は、船を指揮する忠刻の颯爽とした男ぶりに一目惚れし、江戸へ帰ると家康や秀忠へ忠刻に嫁ぎたいと訴えたとされています。この恋は実り、千姫は再び七里の渡しを渡って、桑名へ嫁いできました。

明治元年（1868年）9月25日には、「明治天皇 (K93)」が京都を出発し、桑名の「大塚本陣 (K15)」に宿泊しました。その後、12月に東京を出発し、12月19日には桑名で小休憩されました。

明治2年（1869年）3月、東京遷都のため京都を出発し、3月15日に再度、大塚本陣で宿泊しました。

伊勢国一の鳥居

「七里の渡し (K03)」にある鳥居は、付近に神社があるからではありません。伊勢の国の入り口であり、「宮宿 (K82)」から来た旅人にとっては、お伊勢参りの出発点にあたることから『伊勢国一の鳥居』とも呼ばれました。

近年では20年に一度、「伊勢神宮 (K84)」の式年遷宮のたびに鳥居は建て替えられています。一番最近建て替えられたのは、平成27年（2015年）です。



七里の渡しに建つ『一の鳥居』

一の鳥居の建立

天明年間（1781年～1789年）に桑名町民である矢田甚右衛門、大塚与六郎が資金集めをして、はじめて一の鳥居が建てられました。場所は現在とはやや違っており、東海道を跨ぐように、道路の上に立っていました。道路からやや斜めに立てられるように変更になったのは、いつ頃からかはっきりとわかりませんが、江戸時代の終わり頃には斜めに立っている絵が残っています。

お木曳

いつ頃からかわかりませんが、はやくとも明治時代から一の鳥居は伊勢神宮の式年遷宮のたびに、古材を譲り受けて、建て替えられてきました。最近では、「お木曳 (K42)」と呼ばれる奉納祭がおこなわれます。

関と桑名の鳥居は伊勢神宮内宮・外宮正殿の重要な棟持柱であってもっとも由緒正しい木が使われています。内宮の棟持柱が宇治橋の内側の鳥居、外宮の棟持柱が外側の鳥居に再利用されます。そして20年後、今度は内側の鳥居が関町の追分に移され、外側の鳥居が桑名の七里の渡しに移されて再々利用されています。

生まれ変わる一の鳥居

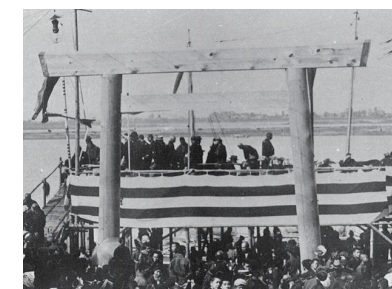
桑名で20年間利用された後にも、さまざまな利用がされてきました。

昭和50年（1975年）に七里の渡しでの使用が終わった鳥居は、小さく割って氏子町内の各家に表札として配られました。

平成7年（1995年）に使用が終わった鳥居は、阪神淡路大震災で被害を受けた神戸市内の神社の鳥居として、再び使用されました。平成27年（2015年）には、絵馬として再利用され、寄付者に配布されました。

鳥居に咲いた桜

昭和30年（1955年）から20年間建てられていた鳥居の上には、鳥が巣をつくっていました。その巣から桜が生えたとされています。昭和50年（1975年）、鳥居を建て替える時に、桜を地上に植え替えました。それから年月が



『一の鳥居』建立祝賀式

経ち、大きな桜樹に育っています。これを「七里桜 (K62)」と呼ぶ人もいます。



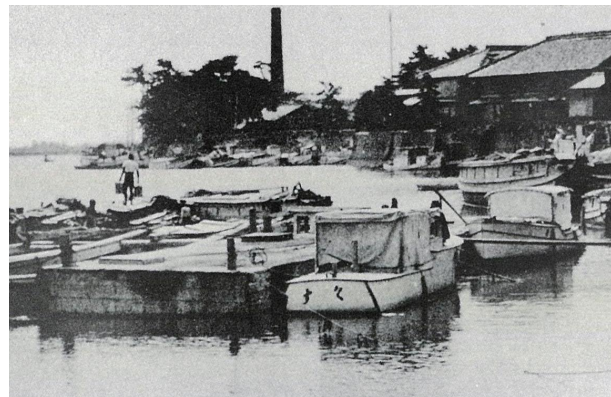
明治12年の『一の鳥居』堤防がなく旧東海道からそのまま渡し口に行くことができます



昭和元年の『一の鳥居』鳥居付近が物資で溢れています



2020年の七里桜



住吉浦からの景色 中央には紡績工場の煙突と、その左に『船津屋』がある

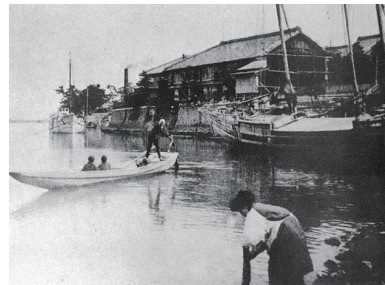
船着場だった住吉浦

伊勢国の玄関口として渡船が発着していた「七里の渡し (K03)」と同様に、住吉浦も「木曾三川 (K60)」上流だけでなく海上各地からの貨物船が発着する船着場でした。

川口町から住吉町にかけての一角が桑名港であり、和船が浮んでいる水郷風景でした。住吉浦は、付近の住民の洗濯場でもありました。

住吉神社

正徳5年(1715年)には、住吉浦の東端に海上の安全の神様である「住吉神社 (K33)」が祀られました。



住吉から川口を望んだ写真 右手にある二階建ての建物が今の『船津屋』

美しい桜並木

明治の河川改修後に、現在の伊勢大橋南詰から住吉町までの堤防に、「初代諸戸清六 (K70)」が約一万本の桜を植え、美しい桜並木が有名な「桜堤防 (K61)」でした。

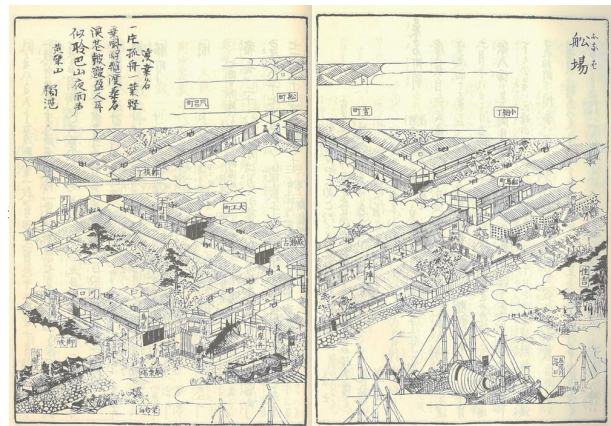


堤防が整備される前の住吉神社



明治時代の桜堤防

K06 舟会所跡



船の手配所

慶長6年(1601年)に東海道の宿駅制度が定められ、「桑名宿 (K01)」は「宮宿 (K82)」と海路で繋がり、川口町の東海道沿いに舟会所が設けられました。『舟役所』『警護屋』とも呼ばれていました。

旅人が宮宿に渡るために舟に乗る手配をする所です。旅人は行く先を告げて料金を払い、指示された船に乗っていました。

馬や人夫の手配所

慶長6年(1601年)に東海道の宿駅制度が定められ、「桑名宿 (K01)」は「宮宿 (K82)」と海路で繋がり、川口町の東海道沿いに問屋が設けられました。宮宿から渡ってきた旅人が、馬や人夫を手配する所で、問屋役という町の有力者が伝馬100匹の他に助郷として人夫を村々に割り当てをおこなっていました。その下に伝馬年寄、伝馬肝煎、馬指、人足指などと呼ばれる人が人馬の手配に当たっていました。現在は駐車場になっています。

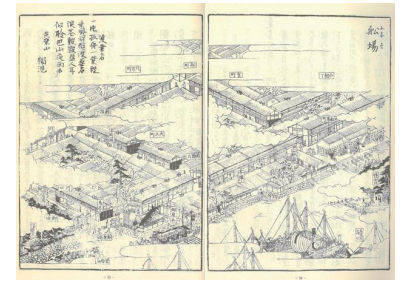


現在の舟会所跡・問屋跡

問屋の仕事

問屋は、宿役人を勤める問屋が1人なら1ヶ所、2人なら2ヶ所置かれました。問屋には『宿役人』、助役を勤める『年寄』、事務をする『帳付』があり、その他に人馬に荷物を振り分ける『馬指』がいました。宿役人や年寄は交代制でしたが、大名が通行する時には全

員が待機していました。人馬は原則として次の宿で交替していたので、『人馬継立て』と言いました。問屋の仕事はこの他に、飛脚業務がありました。幕府公用の文書や荷物を運ぶのが主な仕事でしたが、大名や一般の人が利用することもありました。



江戸時代の問屋左下七里の渡し付近に位置している / 久波奈名所図会

K08 七曲り

七曲りの由来

慶長6年(1601年)に東海道が定められ、道路も整備されました。桑名を通る東海道は、防御のために「七里の渡し (K03)」から7回曲がった所になり『七曲り』と呼ばれました。この場所には、「桑名城 (K21)」内最初の御番所があり、西国諸大名や高貴な人が通過する際は役人が出迎え、行列を整えていました。



七曲見附跡